



伊英独仏

音楽用語辞典

編者

音楽堪能家

篠岡恒悦さん (65歳) 〓 御影 〓

自分を「音楽堪能家」とい

う篠岡恒悦さんは、映画を見る時にバックに流れる音楽が気になって「セリフが聞き取れなくなる」と話す。音楽事始めは「孫息子の演奏が聴きたくて」頼まれもしないうちにピアノを買ってくれた「祖母のたくらみ」だったという。祖母は琴の演奏を趣味にしていた。父は音楽と数学の愛好家で、家には沢山のレコードがあった。都会に育った篠岡さんの「奈良までも過疎地に古民家を求め自転車を探し回った」体力は体育教師の経

験がある母譲り。

高校時代にそれまで馴染んできたドイツ系音楽とはリズムも音階も違う、東欧ハンガリーの作曲家バルトークを知って自分の進む方向が定まった。バルトークは自国の民族音楽に関心を持って採譜を行い、研究をしたことが知られている。

音大で作曲を専攻した後も「様々な音楽に触れたい」思いは強く、海外の大学五十校ほどに尋ねてウイスコンシン大(米国)の民族音楽講座を探し当てた。受講して「国や

くれた。

これまでの篠岡さんの音楽活動は、合唱の指導や市民向け連続講座、作曲約二十曲に編曲が約百曲。最新の仕事はジャズの名曲『テイクファイブ』フルート三重奏版への編曲で、技量の異なる三人に向けて書いた。

篠岡さんが作った『伊英独仏音楽用語辞典』は友人からイタリヤ土産に貰って長く愛用してきた音楽用語辞典に日本語を加えて、さらに増補したもの。四年前に春秋社から出版された。調べものが好きで音楽関連の記事なら「この四力国語の新聞を読める」語学力が発揮された。

辞書で調べ楽譜を読み込む日常で、篠岡さんは年間数件の誤植や間違いを見つけてしまう。ストラヴィンスキー作曲『火の鳥』の楽譜に明らかに誤りを指摘し「よくぞ見つけてくれた」と感謝されたこ



とがある。

次の著書は出版社と交渉中の『366日の音楽』(仮題)

で、その日にクラシック界とジャズ界で何が起きたかを雑学的に取り上げるといふ。小諸市内でも「音楽の深みを伝える、または深みに溺れさせる」講座を始めたい。これらは篠岡さんの楽しい取り組み。「音楽堪能家」という自称は友人から「音楽に浸っている感じが出ている」と好評だ。篠岡さんは音楽についての問合せを携帯電話(070・1272・4008)で受けている。

(取材・文 佐藤 万千子)

ゆらさんの四季の薬膳
春一番、ふきのとつ登場

雪の下から可愛い若草色の顔をのぞかせるふきのとう。春の味といえば関西ではつくしの卵とじ、関東ではふき味噌が有名です。冬の間、エネルギーを貯蔵してきたからだは、春に向け体内の熱や毒素を排出し、エネルギーが外へと向かう準備に入ります。その際に助っ人として現れるのがふきのとうやウド、ワラビなど春の山菜たちなのです。ふきのとうは、いつてみれば春の使者リレーの第一走者。

薬膳ではふきのとうには解毒作用もあり、便秘や花粉症、肝機能向上に効果があるとされています。含まれるフキノール酸は、ポリフェノールの一種で、抗アレルギー作用が。さらに、ふきのとうの苦み成分には悪玉コレステロールを低下させることも現代医学の分析でわかってきました。そこで提案です。この春、ふき味噌を作るときには、動脈硬化を防ぐアーモンドや腰痛・肌荒れを防ぐくるみ、老化防止効果のあるごまなどを加えてパワーアップしてみませんか。

(国際中医薬膳師 小清水由良)



地域によって様々なりズムの中で特にウガンダの音楽が面白かった」と話す。留学は結婚後で生後間もない長男も伴っての決行だったが、生活は妻が邦人にピアノを教えて支えて